

(株)糸編

固有の価値  
を発見して  
商品化する

事例 3

# 日本の織物の灯を消すな 産地工場とブランド、人をつなぐ



セコリ荘の宮浦 晋哉 社長

織物産地とアパレル会社やデザイナーをつなぐ業務を幅広く手掛ける(株)糸編(東京都中央区、宮浦晋哉社長)。全国の織物工場を取材し各種メディアを通じてその魅力を発信するとともに、デザイナーなどの相談に応じながら生地いどへんの売買仲介を行う。売買の引き合いは国外からもあるという。さらに繊維産業の若い担い手の育成や国内企業への人材マッチングも進め、業界の維持発展に貢献している。

「ファクトリークラフト」  
として原石に光を

(株)糸編が手掛ける業務は、広範に及ぶ。まずは、全国の織物工場・工房を回って製品や技術の魅力を取材し、ウェブサイトにや雑誌、書籍等で情報発信すること。自社ウェブメディア「セコリ百景」のほか、「WWD JAPAN」などの雑誌や業界新聞等、十五ほどのメディアで記事の企画・執筆を行っている。「毎年国内の二百カ所ほどの織物産地を訪問取材しています。企画からの依頼のケースが多いですね」と宮浦晋哉社長は言う。また、取材の際に生地見本を買い付け、自社のコミュニティスペース「セコリ荘」でデザイナーやアパレル会社などを対象に展示している。デザイナーなどのつくりたい服のイメージに合う生地を、全国からセレクトして提案するサービスも行う。製品化が決まれば、織物工場との間に立って売買仲介を行う。活動拠点となる本社は東京・月島の古民家。「セコリ荘」はその一室だ。セコリとは宮浦社

長のニックネームにちなんで事業名となった。本社の一階部分におでんなどを出す飲食店を設け、情報を交換したり、アイデアを創出させる交流の場として活用している。「おでん屋には、デザイナーやアパレル会社の社員だけでなく、クラフト作家や職人、学生などいろいろな人たちが集まっています。デザイナーなどが刺激を求めてやってくるサロンという側面があります」インスタグラムで海外に日本の織物を紹介し、輸出につなげる「TEXTILE JAPAN」も開設した。すでにアメリカやスペイン、オーストラリア、中国な

## 企業データ

### (株)糸編

所在地	東京都中央区月島4-5-14 セコリ荘 http://ito-hen.com/
事業内容	国内産地の取材・執筆・コンテンツ制作、書籍出版、コミュニティスペースの運営、素材提案、人材発掘と育成のための学校運営等
設立	2017年5月
資本金	100万円
従業員数	8名

どのバイヤーから直接、あるいは大使館を経由して問い合わせが寄せられているという。

「SNSを活用し手軽に生地をPRし、クリック一つでオーダーできる『ニュー問屋』像をつくり上げていきます」

「セコリ荘」や「TEXTILE JAPAN」で扱う織物は、地域の小規模な工場が生産する希少品が多い。

「大手ファストファッションが大量生産するような生地ではなく、そういった地方工場のすばらしい織物を見つけ、いわば『原石』に光を当てて『ファクトリークラフト』としてPRすることが、当社ならではの活動です」と宮浦社長は言う。

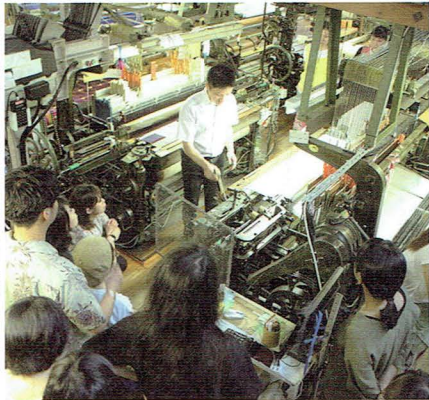


「セコリ荘」の生地見本

教育事業にもアプローチし、

「産地の学校」事業に着手。繊維産業に関心を持つ若者に基本的な知識を教えている。座学メインの「スタディコース」と、その修了者などに向けて産地と交流しながら実践につなげる「ラボ」がある。「スタディコース」では、主に繊維産業の川上から川中領域の基礎知識を学習。「日本の繊維産地の特徴とは」「繊維業界の構図とは」「それぞれの生地はどんな機械でどのように織られているか」といった講座で構成されている。実際に織物工場の見学も行う。

さらに、織物工場の経営者と織物工場への就業を希望する学生や転職希望者を集め、合同説



「産地の学校」での授業風景

明会を実施して採用のマッチングを図っている。

「日本の繊維業界は、八五年のプラザ合意による円高を契機に、一気に中国などでの海外生産に転じました。高齢化も進展し、廃業も相次いでいます。しかし、日本の織物工場の技術力は極めて高く、欧米のいくつものラグジュアリーブランドが発注するなど、世界から評価されています。その灯をみすみす消してしまおうような事態は避けなければなりません。そこで、少しでもその技術の維持発展につながるべきだと思います」

### 海外留学で日本の織物の良さに気がつく

宮浦社長は、ファッションの専門学校で学んだ後、英国の大学に留学しファッションジャーナリズムを学んだ。そこで「日本の織物はすばらしい」という賛辞をたびたび聞くことになる。

「はい、その産地のこの織物工場と、固有名詞を出す人までいました。ファッションの最先端を学ぼうとヨーロッパに行っ

たわけですが、そこで逆に日本が評価されていることを知ったのです。いっぺんに自分の関心が日本の織物工場や繊維産業に向かいました」

日本の織物の職人技は独特で、そのクラフト感は最新の機械でも表現できないものが多いという。例えば、綿とウールとレーヨンという張力の異なる素材を、わざわざ昔の機械を使い、低スピードで丁寧に織って風合いを出す。一方、東レとユニクロが開発した「ヒートテック」のようなハイテク繊維も世界トップレベルの技術だ。

宮浦社長は大学院に進学する予定を変更して帰国。進学費用を使って日本中の織物工場を「夜行バスを乗り継いで、片っ端から回った」。こうして約二百カ所の織物工場を訪問取材し、生地を集めて、二〇一二年に「Secori Gallery」を立ち上げた。さらに、翌一三年には、取材した内容を七二ページの小冊子「Secori Book」にまとめて自費出版する。この売上を原資としてさらに織物工場回りを続けた。ブログやSNSで織物工場の

記事を掲載すると、雑誌やウェブマガジンから声がかかり始めた。さらに、アパレル会社からも「生地のことを教えてほしい」といった申し出を受けるようになった。そんな一三年、現在の本社となる月島の古民家を紹介され、入居を決めた。

『セコリ荘』には、SNSや口コミでデザイナーや学生などが集まるようになっていきました。当初は生地や工場のPRだけでしたが、そのうち『今考えている服の生地にはどんなものがいいか』などと相談を受けるようになったのです。人が集まるサロン的なスペースがほしくなり、おでん屋も始めました。このような流れで、事業が広がっていきました」

さらに、アパレル会社からは布地の調達も依頼されるようになり、オーダーを受けてから織物工場に発注する売買仲介もスタートさせた。中には、裁断や縫製までのOEMを要請されるケースも出てきているという。

「私にはものづくりの経験はなかったのですが、一四年に(株)フロリバンダというアパレルメーカー

の役員に就任して、ものづくりのノウハウを教わりつつOEM事業に着手しました」

一五年には、自社ウェブメディア「セコリ百景」を立ち上げ、新婚旅行を兼ねてキャンピングカーで全国の産地の取材の旅に出る。これを機に「セコリ荘金沢」をオープンさせた。

一六年には、名古屋芸術大学から特別客員教授就任を要請される。そのほか、現在は京都精華大学、京都市立芸術大学、文化服装学院などで講師として教壇に立っている。

「こうして活動が広がっていく過程で、企業などもさまざまな取引が増えたので、『セコリ荘』ではなくきちんとした会社組織で対応しようと、一七年に(株)糸編を設立、事業を一新しました」

## 人々の目を国内の織物工場に向かわせる

主に織物のPRと売買仲介を手掛ける「ニュー間屋」事業は「攻め」で、「産地の学校」は「守り」と位置付けている。

「活動を始めてまだ五年程度

ですが、繊維産業に及ぼす経済的な貢献においては、まだまだであることは自覚しています。しかし、大手アパレル会社がこのように海外生産に向かっているなか、人々の目を国内の織物工場に向かわせるきっかけにはなっていないのではないのでしょうか。

ここから、国内の繊維産業に関心を持つ若者も増え、日本のどこにどんな工場があるのかかわって、つなぎやすくなったという学校の先生もいます。国内の繊維産業に向かう人材の分母は、着実に増やせていると思っています」

さらに、同社が全面協力している「CREATORS TOKYO」というユニットが世界のファッション業界で注目を集めているという。これは、「TOKYO新人デザイナーファッション大賞」のプロ部門の審査に合格した、若手デザイナーたちのユニット。毎年十名程度が選出され、三年間にわたってさまざまなビジネス支援を受けることができる。

これにより、国内外でビジネスを大きく拡大させているという。この画期的なプログラムは、織

維ファッション産学協議会、東京都、東京ファッション・ビジネス活性化実行委員会により二〇一一年にスタートしたもので、糸編は織物産地とクリエイターのコラボレーションや、クリエイターの各種セミナーへの参加支援などを担っている。

「日本の繊維産業を世界に知らしめる大きな機会になっています。そこに関わることで、業界に一定の貢献ができるのではないかと思っています」と宮浦社長は力を込める。

「他人とは違う服を着たい」と望む人の多いファッションの世界において、人々は服のデザインだけでなく、背景にあるストーリーも求めるようになっていっている。大手ファストファッション会社とは対極的な世界だ。そこに、地方の織物工場が「ファクトリークラフト」といって息を吹き返す可能性もありそうだ。糸編の存在は、衰退の一途をたどる国内の繊維産業において、新たないき方を示す可能性を秘めている。

ジャーナリスト 高橋光二